

り、①一人称視点、②二人称視点、③三人称視点という三つの視点に区分されている。「同じ人のパーソナリティも、どの視点から見るか（あるいは見られるか）によって大きく変るし、通状況的一貫性認識の基盤となるデータの質も視点によって全く異なる」（渡邊・佐藤一九九三、二二二頁）とした上で、先の論争においてはこれらの視点が混在していると指摘している。

それでは、この論文における①から③までの各々の視点に関する記述に分け入ってみよう。

まず、①一人称視点についてである。つまり、「自分自身が自分自身を見ることが」ということについてである。この論文は通状況的一貫性との関係性を問うているので、この視点における問題とはアイデンティティ（自己同一性）の問題とされている。アイデンティティは「主観的には自己に関する記憶の連続性の認識によって保証され」、「観察以前の問題であり、それには客観的理由はない」と述べる（同論文、二二二頁）。さらには、「自分以外の誰が、自分についてどのようなデータを集め、分析したとしても、自分の自己同一性は究極的には自分にしか認識できないのであり、自分の自己同一性にとって他者の観察は無意味である」（同論文、二二二―二二三頁）とさえ述べられている。

次に、②二人称視点について見ていきたい。「誰かが特定の他者を見るということ」についてである。この論文では、この視点の特徴として「見る人（観察者）と見られる人（被観察者）との間に社会的・対人的な相互作用があることが多い」とされ、その上で「二人称的他者のパーソナリティに関する認識は、相手の運動的・言語的行動の経時的観察から、帰納法論理によって導かれた規則性の認識に基づいている」（同論文、二二三頁、ただし傍点は原文のまま）とされている。この観察者と被観察者との間に社会的相互作用があるということは、「観察者が被観察者の行動を観察している」と、観察者の存在、観察者と被観察者との相互作用が被観察者の行動に大きく影響を与える可能性がある」（同論文、二二三頁）と指摘している。通状況的一貫性との関係で言えば、さらに一歩踏み込んで、「二人称的な視点からパーソナリティを見るときには、観察者と被観察者の社会的相互作用が通状況的一貫性の認識を擬似的に生み出していると考えることができる」（同論文、同頁）という鋭い指摘がなされている。

最後に、③三人称視点についてである。誰かが不特定多数の他者を見ることが、「についてである。二人称視点と比べると、二人称視点では存在していた観察者と被観察者との相互作用も存在しない、あるいは非常に小さいため、見掛け上の通状況の一貫性も生じにくくなる」(同論文、一三三三頁)と述べられている。さらに、「観察者と被観察者の相互作用は小さければ小さいほど客観的とされるため、観察者の存在が被観察者の行動を安定させることもない。したがって、被観察者の行動は状況の変化によってほとんどん変化することが観察され、通状況の一貫性の存在は一向に確認されない」(同論文、一三三三頁、ただし傍点は原文のまま)とされている。

以上が、当該論文における各々の三つの視点についての概要である。この渡邊・佐藤論文においては、パーソナリティの通状況の一貫性との観点から考察がなされているが、本章においてはフィールドワークとのかかわりの中で、上記の三つの視点についていま一度考えていきたい。

フィールドワークにおける「視点」の問題

これからは、フィールドワーク自身を基点とし、フィールドワークにおける時系列的に考察を進めていくことにしたい。本書第二章においては、「「出会い」以前の「問題」と「「出会い」以降の「問題」」とに区分し、論を進めた。その流れに従えば、フィールドワークを実際に始める前の段階から述べていくことになる。そのような時期においては、研究テーマや問題の選定で頭を悩ませることがあるかもしれない(それらは誰かに与えられて、頭を悩ます必要がまったくないかもしれない)。その際には、前節の①一人称視点と深くかかわるのかもしれない。研究テーマを考えているうちに、自らと対峙し、自己にまつわる問題と格闘し始めるかもしれないからだ。

次に、研究テーマが決まり、大まかな問題が設定され、フィールドワークが始められたとする。先の「「出会い」」とは誰との出会いなのか。フィールドワークの一端は、「「重要な特定の他者」」に出会う道程であると言えるかもしれない。ならば、この「「重要な特定の他者」」に出会う前に、フィールドに佇むだけのフィールドワーカーは、前節の③三人称視点

で見ていると言えるだろう。このような状況の中から、少しずつ他者を特定できるようになり、社会的相互作用を行ない始めることだろう。そうなるに従って、②二人称視点に移行していくのである。また、本書第四章で触れられたビデオカメラを用いた観察などにおいて、マジックミラーの背後に身を潜める「完全なる観察者」⁽¹⁾は、この三人称視点で見ているとも言えるだろう。

そして、先の「重要な特定の他者」に出会い、その人物に話をうかがいながら、互いの関係を深めていく。本書第三章で述べたように、いかなる段階を踏むかは、状況や文脈に委ねられる。一気に恋愛関係に移行する可能性もないとは言えないだろう。恋愛関係に移行するしないにかかわらず、これらはすべて、②二人称視点についてである。この区分に沿って言えば、この二人称視点フィールドワーカーにとってはもつとも切実な問題を生み出す部分なのかもしれない。渡邊・佐藤論文に戻ると、前述の通り、「観察者の存在、観察者と被観察者との相互作用が被観察者の行動に大きく影響を与える可能性がある」(渡邊・佐藤一九九三、二三三頁)という指摘は、フィールドワークを始めたばかりの人や、「研究対象者」を知らず知らずのうちにまるで「夏休みの観察日記用の朝顔」のように見なしてしまっている人にとっては恐怖そのものではないだろうか。当然のごとく、相手に対して何らかの影響をまったく与えないような相互作用はないであろう。そのような架空の状況を理想としながら、血の通った人間である誰かと関係を築こうとするという行為は、きわめて不自然で、不健康だと言わざるを得ない。フィールドワークにおいては、フィールドワーカーは「フィールド」とされる時空間に影響を与えることを前提として考えるべきであろう(例えば、宮内一九九八など)。

ここまでの指摘ならば、多くのフィールドワーカーにとって、うろたえることはないかもしれない。前述の通り、渡邊・佐藤論文では驚愕の指摘が続けてなされている。「二人称的な視点からパーソナリティを見るとときには、観察者と被観察者の社会的相互作用が通状況の一貫性の認識を擬似的に生み出していると考えることができる」(渡邊・佐藤一九九三、二三三頁)というのだ。つまり、フィールドワークの文脈に即して言い換えれば、フィールドワーカーがある「重要な特定の他者」と出会い、互いのやり取りを積み重ねていく中で、フィールドワーカーとその人物とのやり取り

そのものがその人物に影響を与え、さらにはフィールドワーカーがいる場面において、その人物の行動を規定している可能性があるというのである。特定の他者との関係の深まりは、これまでの社会調査やフィールドワークに関する教科書においては、大半の場合、「ラポール」の形成として、少なくとも称揚されてきた。しかし、渡邊・佐藤論文の指摘に従えば、「重要な特定の他者に対する行動規定」の問題として、姿形を変えて新たな姿を現わしたのである。

さらに付け加えれば、このような状況において、②二人称視点の問題のみが存在するわけではないだろう。①一人称視点についてであるが、フィールドワークにおいては、フィールドワーカーの自己洞察やリフレキシビティと密接にかかわる問題を抱えることだろう。この二人称視点が焦点化される状況においては、これらの関係について、フィールドワーカーが自身に対して苦悶することが少なくないように思われる。本書においても、私の「フィールドノーツ」の一部を示した。渡邊・佐藤論文においては、アイデンティティの問題のみに限定されているが、客観的な理由は存在せず、観察以前の問題だと述べられている。本書第二章で触れたように、アイデンティティに関しては、ゴフマンの戦略的なアイデンティティの考えを含み込むなど、より詳細な検討が必要だと思われる。前述の渡邊・佐藤論文における①一人称視点に関する記述には賛同し得ない部分があるが、客観的な理由が得られにくいという点に関しては同意する。このような状況における問題に関して言えば、自己理解と他者理解の問題と換言することもできるだろう。つまり、この一人称視点と二人称視点が合わせられた問題を、フィールドワーカーは抱えることとなる。他者理解は困難であるが、そののみならず、その理解しようとしている自らをも同時に理解することになる。フィールドワークのみに限らずに、このような同時的な他者理解と自己理解の進行が、理解そのものを困難にさせているのではないだろうか。

渡邊・佐藤論文における「時間」の問題

次に、時間の問題についてである。渡邊・佐藤論文では、「バーソナリティを見る時間」の問題とされ、前述の三つの人稱的視点をういながら、説明がなされている。

まず、「一人称的にパーソナリティを見る場合には、その対象は自分自身であり、記憶がある限り、生まれて以来のあらゆる情報が利用可能」（同論文、二三六頁）だと述べられる。一方で、「二人称的・三人称的にパーソナリティを見る場合には、ある特定の時間における観察を基準にしなければならない」（同論文、二三六頁）とされる。そうであるならば、以下のような問題を観察者は抱えることとなる。

「観察の基準にした時点以前のその人の行動や経験について観察者はほとんど知ることができない。時系列的に複数回の観察を行ったとしてもこの点に大きな変化はなく、最初の観察以前のこととはわからないし、観察と観察の間のこととも類推するしかない。特に質問紙法パーソナリティ・テスト等の場合、そのテストが行われた時点以外の時間でのその人の行動や経験に関する情報はないに等しいのである。」（同論文、二三六頁）

これが、渡邊・佐藤論文において提起された「パーソナリティを見る時間」の問題である。本書第四章で提起されたフィールドワークにおける問題とも深くかかわっている。

少し言い換えれば、観察における限定された時間のアポリアと言えるかもしれない。私たちすべては他者を見る際に、その人物におけるすべてのあらゆる時間を見ることは不可能である。ゆえに、二人称的・三人称的に他者を見る際には、限られた時間内で見なければならぬのである。そこからは誰もが逃れられることはない。

渡邊・佐藤論文では、一つの例が出されている。ある場面における複数の個人を観察した場合、客観的には「まったく同じ状況」に置かれている個人の行動が異なることがある。このときに、「こうした行動の個人差がなにを原因に生じているのかは観察データからは知ることができない」にもかかわらず、「素朴な観察者は多くの場合その原因を個人の内的要因に帰属する（基本的帰属錯誤）」（同論文、二三六頁）というのである。つまり、腕に怪我をしている「私」に対して、Aくんは靴を持ってくれたが、Bくんは持ってくれなかった場合、A君は「やさしい」けれどもB君は「や

さしくない」から、そのような結果となったのだという論理であるとされる。そして、異なる状況においても、Aくんは持ち前の「やさしさ」から行動し、Bくんは他者に対して冷たく行動すると考えるのだ。しかし、現実には共存知の通り、それほど単純ではない。渡邊・佐藤論文においては、「私」とAくん・Bくんの両者とのそれぞれの社会的相互作用に基づき、先のような各々の行動の違いとして現われており、異なる状況においても両者が同様の行動をするか否かはわからないと述べられている。

一方で、このように内的要因としない立場の代表として、スキナー (Skinner) による行動分析理論が挙げられている。この理論においては、「一定状況、一定時点での行動の個人差を過去の学習の差から説明」(同論文、二三七頁) がなされるのだ。先の例を再び用いれば、靴を持つてくれたAくんは靴を持つという行為をこれまで「強化」され続け、同種の刺激が与えられたので反応をし、Bくんはそのような行為が「強化」されることなく学習されなかったので反応しなかったのだと、単純に説明することもできるだろう。

さて、渡邊・佐藤論文においては、タイムマシンが発明されるまでは、上記の原因を説明することはできないので、これら二つの考え方のうち、どちらが正しいということはできないと論じている(私はタイムマシンが完成しても、解明できないと考えるのだが)。そして、研究者の「理論的嗜好の問題」であるとさえ述べるのである。

フィールドワークにおける「時間」の問題

ここからは、前項の渡邊・佐藤論文における「時間」の問題を踏まえた上で、フィールドワークにおける「時間」の問題を考えていきたい。

前項の「観察における限定された時間のアポリア」という問題からは、フィールドワーカーは逃れられないことだろう。限られた時間から得られた情報を組み合わせながら、フィールドワーカーならずとも、私たちは他者だけではなく、他者をも含む現実を理解しようとしている。理解がままならない場合でも、かりそめの解釈を積み重ねながら、何とか

生活している。前項におけるAさんとBさんの例に対する二つの説明とは、フィールドワークの文脈で読み替えれば、両者の行動の「解釈」ということになる。この流れに沿えば、パーソナリティ心理学というフィールドにおいては、主には、先のような二つの解釈がなされると述べることも可能であろう（そのような思いつきの解釈などではないと批判されてしまうかもしれないが）。渡邊・佐藤論文における先のエピソードに戻ろう。「私」に着目すれば、その解釈もややかたちを変えていく。「私」の属性（人種、国籍、性別、障病の有無など）をいろいろと考えてみれば、AさんとBさんの行動の相違は、その特定の属性への反応の相違とも言えるかもしれない。「文化」という要因を考慮すると、そのような特定の属性への反応そのものが、各々の文化によって規定されているという説明もできよう。だが、一方で何もかもを文化に還元していくことには、私は疑問を持っている。渡邊・佐藤論文においては、「観察できない要因、すなわち『現存しえない状況要因』を、正当な論理的基盤なしに行為者の内部に放り込む」ということで観察における時間の問題を処理することが、パーソナリティ研究では一般的なのである」（回論文、二二七頁）と批判されているが、同様に何もかもを「文化」に放り込むという態度も戒められるべきであろう。要するに、自戒の念を込めて述べると、個人の「内的要因」や「文化」などを、何でも包含してしまうブラックボックスにしてはいけない。

さらに、フィールドワークにおける解釈には、各々のフィールドワーカーが依って立つ各々の理論が大きな影響を与えることだろう。渡邊・佐藤論文において、それらについては研究者の「理論的嗜好の問題」とまで述べられていたが、私は少しだけ意見を異にする。理論自体を嗜好物のように取っ替え引っ替えてできるようなニュアンスには抵抗がある。フィールドワークにおける解釈もそうであろうが、解釈する主体のこれまでの体験と経験に密接に深くかわっているのではないだろうか。そして、その依って立つ理論も、その主体の体験と経験に密接に深くかわりながら、選り抜かれている／つくりあげられているのではないだろうか。この発想自体が、私自身のドグマである危険性を恐れるのだが、当事者自身の体験と経験と一切結び付くことのない解釈枠組みを、私自身は想定できない。つまり、私たちは、私たち一人ひとりのこれまでの生活「時間」に影響された解釈を行なっていると言えるのかもしれない。

このように考えるならば、渡邊・佐藤論文においては、「時間」に関して論じられていても、欠落している部分があるのではないかと思える。つまり、観察者自身の一人称的な「時間」が、二人称的・三人称的に観察を行なう際に影響を与える問題についてである。つまり、フィールドワークの文脈で言い直せば、フィールドワーカー自身の自己の変容の問題となるだろう。フィールドワーカーは生身の人間である。まるで精密な測定器のように、変化することなく、来る日も来る日も観察を行ない続けるわけではない。フィールドワークにおける「時間」の問題として、本章で新たに私が付け加えたいのは、この点である。つまり、フィールドワーカーの「発達」の問題である。

フィールドワーカーがカルチャー・ショックを受けて、落ち込むといったエピソードは数限りないだろう。名作と呼ばれるエスノグラフィの多くが、フィールドワーカー自身の成長物語を含んでいることからもうかがえるだろう。その最たるもの一つとしては、W・F・ホワイトの『ストリート・コーナー・ソサエティ』(Whyte 1983) が挙げられる。フィールドワーカーは、フィールドにおいて子どもの発達のようなプロセスをたどるとも言われる。いま私は保育者養成機関で、子どもの発達に関する講義を担当させていただいている。フィールドワークを体験・経験した者から述べると、実際の子どもの発達のプロセスとは当然のことながら異なるものである(そのことに関しては別の機会に論じたい)。

フロアからの質問

それでは、冒頭の質問に戻ろう。

この短い質問の中には、これまで述べてきたことと深くかかわる、フィールドワークに関する多くの要素が詰められている。

つまり、ある団体において修士課程の頃からフィールドワークを続けているという質問者は、博士課程に進学し、あわせて非常勤講師として講義を行なう立場になるなど、自らのポジションの移行に伴い、フィールドでの自らに対する

対応の変化に戸惑いを感じていたようだった。

この質問者のみならず、フィールドワークを長期にわたって継続していると、フィールドワーカーのポジションの移行を伴うことが少なくはない。学生の頃からフィールドワークを実践する人たちも、以前に比べると増えているように思う。そのような人たちが大学院に進学し、その後、高等教育機関や研究所などにポジションを得たとすると（現在の状況ではかなり困難なことであるが）、この質問者が感じたような戸惑いを覚えるかもしれない。私自身も同様の経験をしている。大学院時代にお話をうかがっていた方たちにお会いすることがあっても、いったんは「宮内くん」と以前のように呼んでいたのだが、「宮内くん、先生なんだよね。先生って呼ばないといけないんだよね。もう宮内くんなんて呼んじゃダメなんだよね」などと、冗談半分もあるが、言われることがある。当然ながら、「はい、先生と呼んで下さい」などと答えるはずもなく、「宮内くんのままで、お願いします」とお願いする。しかし、「くん」づけで呼ばれる続ける機会はますます減っている。お互いにしつくりといかないように感じるのは、自らの居心地の悪さが投影されているとも考えられるかもしれない。

この質問者の場合は、さらに複雑であるようだ。フィールドにおいて以前から見知った人たちは、質問者のことを茶化して「センセー」と呼んでいるが、そのことがその団体に新たに加入した人たちにとっては「先生」と呼ばれる存在として意識させてしまう。その結果、新たに加入した人たちは、この質問者を「先生」としてとらえ、「子どもについての相談」をする対象として見なしてしまうようだ。そして、質問者は「調査」ではなく、「面接」をしているという気分になってしまうという。質問者のセンシティブな一面を垣間見たように感じる。この質問者には、私はこのシンポジウムで初めて出合い、ことばのやり取りを行なったのはこの一度のみである。その後はお会いしておらず、メールアドレスを交換し合ってメールのやり取りをしたこともない。わずか一度のことばのやり取りのみでさもわかったように解釈することは控えたいし、恐らく文脈の誤読もあるだろう。質問者ご本人が本章を読む機会があれば、本書内でも批判したワンショット・ケース・スタディにおける誤解を地で行く解釈に吹き出してしまうかもしれない。

そのような可能性を抱えながらも、この質問がフィールドワーカーのポジションの移行と、ポジションに備わる権力性とフィールドワークとの関係性の問題に関するものであると私はとらえていた。この質問者の具体的な質問は、「どうやったらフィールドワーカーとしての寿命を延ばせるのでしょうか？」という問いであろうが、このような問いが先には、「やめたくはない」ということばに、何らかのポジションと引き替えに、諦めざるを得ない何かがあることをはっきりと理解されているのか、漠然と感じておられるのかも思えた。

この質問に対する、その場での私の回答は以下のようなものだった。こちらでも引用したい。

「痛い話ですね。僕はもうフィールドワーカーとして死んでいるかもしれない。修士課程の時には、フィールドワークの場で涙ながらに「宮内君がこんな人だと思わなかった、だめだよ」と言ってくれました。今、僕に対して「それ、だめだよ」と言ってくれる人はいなくなっていると思います。もうそういうことを言ってくれないから、僕は終わっているのかもしれない。見た目が若いので20代だと思つて「宮内君」と言われるのがラッキーかなと思つていますが、かなり有名な先生が我慢していました。「自分はいろんな学校に行ける。学校自身が「先生、来てください」と呼んでくれる。招かれて世界各地の学校が見える。院生はお願いしても入れてくれないから大変だね」とおっしゃったことがあります。「この人は終わつてな」と思つた経験があります。そう思つた時点でだめだと思ふんですね。僕はそうならないようにしたいなと思ひますが、ポジション、年齢と肩書きなど、自分ではどうしようもない部分があります。フィールドワーカーという仕事のみをやつていくという手はあるけど、誰もお金はくれない。何かを得たら何かを引き替えに失つてしまうので、失わない前に、いい仕事をしてくだささい」(森山・宮内ほか二〇〇四、六七―六八頁)

フロアからの質問に対するこの回答は、その場で録音されたものを第三者がテープ起こしをしたものである。より正確に述べると、音声は文字化された原稿を、文章として意味が通じるように校正する機会を私は一度得ている。この活

字はその場での忠実な再現ではないことに注意しなければならない。何人もの人間による手が入り込んでいるわけである。この私の発言はその場での文脈の支配によるところが非常に大きいと思われるので、この箇所だけを抜き出して記すことは、かなり誤解が生じる危険性が高いのではないだろうか。⁽³⁾そこで、本書で改めて引用するにあたって、誤解を避けるためにも、少し解説を付け加える必要があるだろう。

先にも少し述べたように、この場で、私が伝えたかったことは、フィールドワーカーのポジションとフィールドで出会おうとする方々の視点の問題である。

まず、先にフィールドワーカーの時間の問題について述べた際に、フィールドワーカーの発達について指摘した。本書第一章での私のような「社会調査素人」が、社会調査の体験・経験を経ることによって、社会調査を運営できるまでになる。このことはスキルの向上と言えるかもしれない。フィールドワークにおいては、フィールドワーカーが様々な人と出会い、そして教えていただくことによって、内面的に成長していくこともあろう。このことはスキルのみの問題ではない。このようなフィールドワーカーの内面的側面とは別に、フィールドワーカーの外面的なポジションという側面もある。私たちが生活する社会では、基本的に、外面的なポジション、換言すれば、役割や地位に対応して対応する人は多い (Goffman 1959)。例えば、ある人物の内面が非常に幼いままであっても、外面的なポジションが高いと見なされていれば、そのポジションに然るべき応対がなされる。その人物がいない場面においては、その幼さが指摘されたり揶揄されたりすることがあるかもしれないが、面と向かって直接言われることはほほほに等しいだろう。私自身が外面的なポジションが高いとは主観的には思えないし、内面の幼さも自覚しているが、外面的なポジションにおいては高等教育機関の教員である。このような外面的なポジションは、多くの場面において、外面的なポジションが知られている (気が置けない間柄ではない) 同業者以外の人たちの批判や忠告を受ける可能性がきわめて低くなるように思われる。本書の「はじめに」と「第一章」においてフィールドノーツの一部を引用したが、高等教育機関に勤務するようになってから、あのようなことをいいただくことはほとんどない。それは、私が内面的に飛躍的な成長を遂げたからで

は決してない。ただ外面的なポジションによって、ことばが阻まれていられるだけであると、私は考えている。

そのようなポジションに居心地の良さを感じておられる方もいらっしゃるのだらう。私もそのような気持ちがないとは言えない。さらに、フィールドワークや社会調査が以前よりも進めやすくなったと喜ばれている方もおられよう。しかし、果たしてそうなのだろうか。プロジェクトとしては物理的には進みやすくなったかもしれない。しかし、社会調査やフィールドワークとしては本当に進行しているのだろうか。

先のシンポジウムでの私の発言における傲慢すぎる部分は反省している。感情的にはなく、この場ではその意図を説明したいと思う。私が述べたこと、端的に言えば、それは、フィールドワークや社会調査において、招かれることの危険性についてである。換言すれば、フィールドワーク・社会調査と権力構造の問題と言えるかもしれない。このような問題を考える際に、必ず頭に浮かぶ二人の民俗学者がいる。宮本常一と柳田國男である。高級官僚であった柳田國男は、農村を対象とした民俗学のパイオニアである。その評価は変わることがないだろうが、柳田が農村に調査に向かった場面に視点を移せば、その認識は少し変わってくるかもしれない。柳田が村を訪れる際には、元高級官僚の「偉い人」が来るということで、村ではできる限りの最高のもてなしをしたというのだ。しかも、古老を手配させたとも言われている。宿泊は、一流旅館のもっとも高級な部屋にしか泊まらなかったと言われる。一方の宮本常一は、柳田國男の弟子にあたるが、柳田とはまるで違っていた。本書のサイドストーリー③でも触れたが、宮本常一はとにかく歩いた。生涯にわたって、地球四周分を歩いたそうだ。いつもの汚い服装のまま、村に入っただけという。誰もが学者だとは思わない。人々との立ち話から、様々な発見をし、数多くの資料を頭に詰め込んでいった。村の端で農作業をしている女性たちの話に聴き入ったのも、宮本常一だ。そして夜になると、そのまま知り合った農家にお世話になったと言われている（長浜一九九五、佐野一九九六）。

あまりにも対照的な二人の民俗学者の話である。私は先のシンポジウムでの発言で言及した「有名な先生」に、かつての柳田國男の姿を重ねてしまう。柳田は意図的に、村人たちに接待を要求したわけではないだろう。結果的にそうな

ってしまったのかもしれない。しかし、私には、そのような作られた現実に基づき、社会を論じていくことには違和感がある。そのような立場になれない負け犬の遠吠えと一笑に付されるかもしれないが、私にとっては社会調査やフィールドワークにおける認識論的な重要な問題であると思えるのだ。自らがジグソーパズルの一ピースのように埋め込まれている社会における権力構造に自覚的でないと、自らが見ている現実が、周囲の配慮により作られた「現実」であるということに気づくことなく、他の人たちにも同様に見えている現実であると見なして、それらを描き論じていくということになりかねない。この際に、周囲の配慮によって作られた「現実」を無理矢理にあらゆる人にとっての「現実」にしてしまえば、当人にとってはまったく問題はないだろうが、その他の人たちにとっては自分たちの現実とは乖離が激しいという事態になるだろう。

最後に、この質問者は「こんなにおもしろいことやめたくないのですが……」と述べているが、現在のところ、フィールドワーカーというポジションのみで生活していくことはほとんどできないと思える。何らかの生活の糧を得るために働かねばならない。幸運な場合は、高等教育機関や研究所にポジションを得ることがあるだろう。しかし、先にも述べたように、一方で、そのことは外面的なポジションによって、社会調査やフィールドワークにおいて、宮本常一が歩きながら見た世界をものはや見ることができなくなることであると言えるかもしれないのだ。本章において言及し続けた渡邊・佐藤論文において、「視点」の問題の箇所ですでに引用してはいるが、「二人称的な視点からパーソナリティを見るときには、観察者と被観察者の社会的相互作用が通状況の一貫性の認識を擬似的に生み出していると考えることができ」(渡邊・佐藤一九九三、一三三頁)と指摘されている。このことは、ポジションとのかかわりでは、より一層重い指摘であると言えらるだろう。

おわりに

先の質問に、はっきりとは答えていなかったかもしれない。この場を借りてお答えしたい。私はフィールドワーカー

には「寿命」はあると思う。しかし、フィールドワーカーとしての「寿命」を延ばすことは、様々な手法によって可能かもしれない。

自らの視点の特異性に無頓着になったり、それが自明化してしまうならば、そこで得られたデータは現実とは乖離した自らの物語を補完するための単なるパーツになってしまふ恐れがあるだろう。そうなれば、フィールドワークを行なう意味はもはやないのではないだろうか。フィールドワークを行なったという事実は、研究成果に対しての単なるアリバイ作りの意味しか持ち得ないように思う。

そのような意味では、初めてフィールドワークを行なう者の多くは何事に対しても、恐れおののくあまり、過剰な、もしくは不自然な対応を行なってしまうかもしれないが、少なくともその恐れによって現実に飲み込まれることはあつても、現実を過剰に矮小化することは少なくなるのではないだろうか。そう考えれば、フィールドワーカーにとつては、フィールドワークにおいて様々な体験や経験を経ることによって文脈を理解する力を高めながら、一方で、初めてのフィールドワークの際に感じた恐れ、脅威、敬意などの感情を忘れることなく保持し続けることが、フィールドワーカーとしての「寿命」を延ばすことに繋がるように思える。

〔注〕

(1) 佐藤郁哉氏は海外の先行研究をもとに、フィールドワーカーが「完全なる参加者」・「観察者としての参加者」・「観察者としての観察者」・「完全なる観察者」という四つの理念型の間を揺れ動くことを示している(佐藤一九九二、一三三―一三五頁)。

(2) 渡邊・佐藤論文においてはこのように述べられている。「質問紙法によるパーソナリティ調査は「意識報告」を扱うものとされ、一人称視点からのデータであるように解釈されているが、手続的には一定の「テスト刺激」に対する「反応」を客観的に測定し、個人間の差異を導き出しているのだから、そこで得られるデータは三人称的なものである」(渡邊・佐藤一九九三、一三四頁)。そうすると、社会調査におけるある種の意識調査も、同種の説明が可能なのかもしれない。

(3) 文字になってしまうと、実際に鼻についたり、傲慢な表現が散見される。それは、フロアとの関係や笑いといったやり取りが捨象されているという側面もあるだろう。その場の雰囲気をいま一度想像していただければ幸いである。引用文献のみならず、立命館大学人間科学研究所のHP上でもシンポジウムの様子が掲載されている。

【文献】

- 草山太郎・宮内洋ほか 二〇〇四 「シンポジウム フィールドでのへ声」をどのように聞くのか?—「加工」以前の現場研究 覚え書き」、『学術フロンティア推進事業プロジェクト研究シリーズ第7号 フィールド・質的・カルチュラル—対人援助の実践と研究を支える技法と理論』立命館大学人間科学研究所、四四—七二頁
- 佐藤郁哉 一九九二 「フィールドワーク」新曜社
- 佐野真一 一九九六 「旅する巨人—宮本常一と洪沢敬三」文藝春秋
- 長浜功 一九九五 「彷徨のまなざし—宮本常一と学問」明石書店
- 宮内洋 一九九八 「外国籍園児のカテゴリー化実践」、山田富秋・好井裕明(編)『エスノメソドロジーの想像力』せりか書房、一八七—二〇二頁
- 渡邊芳之・佐藤達哉 一九九三 「パーソナリティの一貫性をめぐる『視点』と『時間』の問題」、『心理学評論』第三六卷二号、二二六—二四三頁
- Ben, D. J. & Allen, A., 1974, "On predicting some of the people some of the time: The search for cross-situational consistencies in behavior." *Psychological Review*, 81, 506-520.
- Goffman, E., 1959, *The presentation of self in everyday life*. Doubleday & Company. (石黒毅(訳) 一九七四 「行為と演技—日常生活における自己」誠信書房)
- Krahe, B., 1992, *Personality and social psychology: Towards a synthesis*. Sage Publication. (堀毛一也(翻訳) 一九九六 「社会的状況とパーソナリティ」北大路書房)
- Mischel, W., 1968, *Personality and assessment*. Wiley. (詫摩武俊(監訳) 一九九二 「パーソナリティの理論—状況主義的アプローチ」誠信書房)
- Whyte, W. F., 1993, *Street corner society: the social structure of an Italian slum*, Fourth edition. the University of Chicago Press.

(奥田道大・有里典三(訳) 二〇〇〇 『ストリート・コーナー・ソサエティ』有斐閣)

105, 127

は

パーソナリティ 119-123, 125, 127, 133,
134

ひ

被調査者 iv, 5-7, 10-13, 16, 20, 38, 61, 67,
68, 69

ビデオカメラ 20, 78-81, 83, 105-107, 123

標本 v

ふ

フィールドノーツ iv, viii, 15, 114, 124, 131

フィールドノート 114

フィールドワーカー viii, 18, 60, 62, 71, 72,
74, 77, 81-83, 107, 119, 122-124, 126,
127, 128, 130, 131, 133, 134

フィールドワーク iii, vii-ix, 3, 12, 15-18,
20, 24, 30, 47, 59-62, 67, 69-71, 73, 78,
79, 101, 104, 107, 114, 115, 120, 122-125,

127-134

服装 5, 6, 18

舞台裏 35

文脈 viii, ix, 14, 134

ま

まなざし 63

や

藪の中 105-107, 110

ら

羅生門問題 105, 106, 110

ラポール 124

り

量的調査 14

わ

われわれ感情 (we-feeling) 66

索引

あ

アイデンティティ 29, 121, 124
厚い記述 iv, viii, 113
圧迫面接 12
アマチュアリズム 115

い

異議申し立て 49
インストラクション 4, 18
インフォーマント 104

え

エスノグラフィー vii, 24, 82
エスノメソドロジー 82, 102, 103, 109

か

会話分析 102
カウンセリング 70
カメラ viii
観察者 120-123, 125, 133, 134

き

帰属錯誤 125
記録 viii

こ

小型(カセット)テープレコーダー 10,
12, 13
呼称 38

さ

サンプリング 7, 30, 31

参与観察 viii, 79

し

事情通 (the wise) 104
視線 45, 63
質の調査 iii
社会調査 iii, vii, viii, 3-8, 10-14, 16-19, 30,
60-62, 67-69, 79, 124, 131-134
重要な他者 31
消極的な参加者 80

せ

生活史 iv, v, 9, 11, 14, 15, 20, 50, 55

た

対象者 9, 18, 31, 59, 61, 69

ち

調査者 4, 5, 10, 12, 16, 20, 38, 42, 61, 62, 67,
68, 72
調査者側 16
調査票 4-7, 9-14, 17, 20, 38
調査票中心主義 14, 17, 67, 69

つ

通状況の一貫性 120-123, 133

て

出会い 10, 30, 32, 38, 39, 42, 108, 122

と

当事者 29, 30, 34, 35, 43, 56, 60, 62, 69, 104,

あとがき

研究について考える際に、必ず頭に浮かんでくる一冊の本がある。

阿部謹也『自分のなかに歴史を読む』（筑摩書房、一九八八年）。

これから卒業論文や修士論文を書く方には是非読むことをお勧めしたい一冊だ。中学生以上を対象にした、換言すれば、中学生も理解できるように、非常にわかりやすい文章で書かれている本である。

この中で、著者は恩師（上原専祿）のことばとして以下のようなことばを記している。

「解るということはそれによって自分が変わるということでしょう」

そして、著者はこのことばに続けて、「解る」ということについて、このように述べている。

「もちろん、ある商品の値段や内容を知ったからといって、自分が変わることはないでしょう。何かを知ることだけでうかんたんに人間はかわらないでしょう。しかし、『解る』ということはただ知ること以上に自分の人格にかかわってくる何かなので、そのような『解る』体験をすれば、自分自身が何がしかは変わるはずだとも思えるのです。」（前掲書、一七一―一七八頁）

著者のことばをしっかりと理解しているかどうかは心許ない。しかし、学生時代に読んだこの本のことばが、今なお心の中に残り続けている。

本書で記してきたように、私はフィールドワークという行為を通して、数多くの体験をしてきたように思える。いまの視点からながめてみると、その体験を通して、自らが変わってきたように思える。しかし、そのことが、私自身が解

り続けた軌跡であると主張するつもりはまったくない。「解る」という地点の手前であがき、もがき続ける軌跡を記したものが本書であるというほうが正しいだろう。その体験の中で、どのように変わり、どのような部分が変わったのかについてを、本書の各章で述べてきた。これから社会調査やフィールドワークに挑もうという方や、フィールドワークのプロセスで悩んでいる方にとって、何がしかのヒントが本書の中に埋まっていることを心から願っている。

本書は当初、二〇〇五年三月に発行される予定であった。しかし、私が過労で倒れ、入院してしまったために、その発行が半年遅れてしまった。退院後には、ご縁があつて新たな職場に移籍させていただいた。大学入学以来、二十年近く生活していた北海道を離れて未知の土地に移り住むことは、私にとつてとても大きな出来事だった。そのような中で、私にとつては初めての単著書である本書は生まれた。まだまだ至らぬ点が多い。そして、力及ばず、含み込めないところもあった。例えば、沖縄県を中心にした離島部でのフィールドワークについては、本書ではほとんど触れられてはいない。地域社会におけるまさに「野良仕事（フィールドワーク）」に基づいた記述も必要であつたと思ふ。

本書を執筆し、発行されるにあたり、あまりにも多くの方々にお世話になつた。本書の編集にあたつていただいた北大路書房の北川芳美さんも、そのお一人だ。一冊の本を世に送り出すという体験を初めてしたことによつて、編集の方に謝辞を贈るということの意味を私も理解することができた。

ことばを換えれば、学校や職場やフィールドで多くの方々を教えてくださった体験と経験から、本書は成り立っている。そのお一人おひとりの名を挙げて感謝の意を表したいが、プライバシーや紙幅の関係上、それは許されないことだろう。この私の気持ちだけでも、この場でお伝えしておきたい。心から感謝申し上げます。

二〇〇五年八月

宮内 洋

著者紹介

宮内 洋 (みやうち・ひろし)

1966年生まれ。高崎健康福祉大学短期大学部児童福祉学科助教授。臨床発達心理士。
日本学術振興会特別研究員 DC1、琉球大学非常勤講師、日本学術振興会特別研究員 PD、
札幌国際大学人文・社会学部心理学科教育職員、札幌国際大学社会学部ビジネス社会学科
ライフデザインコース主任等を経て、2005年4月より現職。

著 書

「エスノメソドロジーの想像力」(共著) せりか書房、1998年
『教育のエスノグラフィー』(共著) 嵯峨野書院、1998年
『フィールドワークの経験』(共著) せりか書房、2000年
『保育実践のフィールド心理学』(共著) 北大路書房、2003年

体験と経験のフィールドワーク

2005年9月1日 初版第1刷印刷

定価はカバーに表示
してあります。

2005年9月10日 初版第1刷発行

著 者 宮 内 洋
発 行 者 小 森 公 明
発 行 所 (株)北大路書房

〒603-8303 京都市北区紫野十二坊町12-8

電話 (075) 4 3 1 - 0 3 6 1 代

FAX (075) 4 3 1 - 9 3 9 3

振替 0 1 0 5 0 - 4 - 2 0 8 3

©2005

印刷・製本/創栄図書印刷株

検印省略 落丁・乱丁本はお取り替え致します。

ISBN4-7628-2476-3

Printed in Japan